広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	小松左京とオーウェル『一九八四年』 : 小松左京『戦争はなかった』論
Author(s)	横田, 拓也
Citation	論叢 国語教育学 , 19 : 47 - 56
Issue Date	2023-07-31
DOI	
Self DOI	10.15027/54975
URL	https://doi.org/10.15027/54975
Right	
Relation	

小松左京とオーウェル『一九八四年』―小松左京『戦争はなかった』論―

横田　拓也

一　はじめに

小松左京は、SF黎明期の一翼を担った日本SF界の立役者であり、星新一や筒井康隆などと共に日本SFの第一世代として今日までSFジャンルを牽引してきた作家である。本稿では、小松のオーウェル『一九八四年』[1]受容について検討を行う。

従来注目されてこなかったが、小松左京は早い時期からオーウェルに関心を示した作家の一人である。例えば、雑誌『風景』（一九六六・十二）に掲載された武田泰淳との対談「SFを探る」の中で『一九八四年』を話題にしている。さらに、その対談のなかで『一九八四年』に設定が酷似した武田泰淳『第一のボタン』[2]（初出：『別冊文藝春秋』、一九五〇・一〇）に言及し、「私は武田さんの「第一のボタン」の結末がどうなるか、きょうはまずそれを聞こうと思っていたんです」と強い興味を示している。他にも、『SFファンタジア〈№5〉』（一九七八、学習研究社）に収録された「ユートピア幻想の崩壊」や、雑誌『正論』（一九八四・二）に掲載された「わが青春の『一九八四年』―ジョージ・オーウェル回想」では、小松の『一九八四年』への評価を確認することもできる。

相良英明（一九九八）は、「日本におけるジョージ・オーウェル受容の諸相」（『比較文学』第三〇巻、一九九八、二四頁）において、「早い時期からオーウェルに注目していた作家」の一人に小松左京を挙げ、「小松左京の場合、他の人と違うところは、スターリニズムやナチズムという全体主義の問題、ユートピアと管理社会という問題から『一九八四年』に接しかつ論じているだけではな」いと、小松の『一九八四年』の受容について見解を述べている。そして、「政治小説と科学小説の融合を『一九八四年』に見出し」、「彼自身も、政治小説、あるいは社会小説と科学小説の融合を自分の作品で果たすようになる」と、小松の創作にオーウェルの影響が少なからず及んでいたことを指摘している。

彼の作品のなかでも、一九六八年に発表された『戦争はなかった』は、『一九八四年』との影響関係が窺えるSF作品である。本作品は、一九六八年八月に雑誌『文芸』の「短編小説特集」の企画で発表された一二編の短編の内の一つである。しかし、この企画は注目を集めるには至らなかった。当時の「文芸時評」において、小島信夫（一九六八）は「「文芸」には、おそらく編集者が涙ぐましい努力の末、集めた短編一二があるが、残念ながら十分に効果をあげてはいない。武田、佐多、埴谷、藤枝、杉浦、吉行、開高、小川、竹西、なだ、野坂、小松の諸氏のものだ。短編一つだって読むに価するものを書くのは、いかに容易なことではないかが、分る」[3]と、消極的な評価を下してい

る。管見の限り、山野浩一編『暴走する正義　巨匠たちの想像力（管理社会）』（二〇一六、筑摩書房）の「解説」を除いて、『戦争はなかった』に焦点を当てた評価や先行論は確認できず、他の小松作品に関す議論のなかで作品名に言及したものがわずかにあるだけであった。

そこで、本稿では小松左京『戦争はなかった』を主な分析対象とし、見落とされてきたテクストの価値を評価し直すとともに、小松のオーウェル『一九八四年』受容について考察を試みる。なお、本稿では『暴走する正義　巨匠たちの想像力（管理社会）』（二〇一六、筑摩書房）における「戦争はなかった」から本文を引用している。

二　消えた戦争―『戦争はなかった』の描く日本―

先に、作品のあらすじを記す。

本作品の舞台は、一九六八年当時の日本である。ある日、主人公は、旧友との宴会の最中、戦時中の思い出がこみ上げ、その時代の軍歌を歌い始める。しかし、周囲の仲間は、その歌を知らないと言い始める。主人公は、「戦争を忘れたのか！」と旧友たちに詰め寄るが、「どうかしている」と白い眼を向けられ、そのうちの一人は「戦争なんてなかったじゃないか」と答える。からかわれていると思った主人公は、もどかしさをぶつけるように、そのまま泥酔してしまう。

翌日、目を覚ました主人公は、心配の電話をしてきた旧友や妻に改めて、「戦争」について問い詰めるが、誰一人として「戦争」について覚えていなかった。信じられない思いで、街に出た主人公は、書店に「戦争文学」が一切置かれていないことや昭和一二年以降の世界情勢の流れが歴史年表を見ても「理解を絶したもの」になっていることに気づく。そして、歴史的事実として消滅してしまった「大東亜戦争」について自問自答する。

その後、主人公は混乱しながらも、大戦争の痕跡を探しに広島まで向かう。しかし、そこには、平和公園も原爆ドームも存在せず、「戦争」についての自己の記憶・認識まで疑ってしまうようになる。しかし、「この世界が、本当にあの戦争の体験をもっていないのなら、「告知」してやる必要がある」と使命感を抱き、「戦争があった」という事実を伝えることを決心する。

周囲の冷ややかな視線を浴びながらも、主人公は「戦争」について町中で喧伝し続け、町ではちょっとした騒ぎになる。いよいよ警察や医局員まで駆けつける事態になってしまい、主人公は捕まえられ、搬送されそうになる。そのとき、主人公は、自分を病院に連れて行こうとする医局員の腕章が戦時中の憲兵の腕章であったことに気付く。そのことを指摘した途端、急に乱暴になった動作で医局員と警察は彼を車に強引に連れ込もうとする。主人公は暴れて逃げ出そうとし、なけなしの力で軍歌を叫んだが、そのままつかまってしまう。町の人々は、「あれはいったい何の歌だろう」と、いぶかる気配さえ見られず、何事もなかったかのように日常に戻っていく。

以上が、本作品のあらすじである。本作品は「歴史の改変」をモチーフとしたSF作品である。このモチーフは、小松左京のデビューを飾った作品である『地には平和を』（初出：『宇宙塵』六三号、一九六三・一）[4]においても見出せる。『地には平和を』では、「無条件降伏をしないまま八月一五日を迎えた」パラレルワールドの日本を描くことで、「戦後社会に対する強い懐疑」（樺山、二〇一六）を表現することが試みられている。『地には平和を』について、SF作家の樺山三英は次のような評価を下している。

作品（『地には平和を』を指す＝稿者）の中では結局、歴史が修

正されて「正しい歴史」が取り戻されるのだが、その様子は実に皮肉な調子で描かれている。小松は歴史改変のモチーフを用いることで、戦前の軍国主義をなかったことにし、高度経済成長に向かっていく戦後社会に対する強い懐疑を打ち出していた。彼は以後も『日本アパッチ族』や「戦争はなかった」「春の軍隊」といった作品群で同様の懐疑を描いていくことになる。[5]

小松は『地には平和を』以降も、「歴史改変SF」を継続して発表しており、本稿で対象とする『戦争はなかった』もその系譜に連なる作品である。ただし、「戦争」それ自体を歴史から抹消した「世界」を描いた点において、本作品は小松の新たな挑戦であったともいえるだろう。では、本作品ではいかにして「戦後社会に対する強い懐疑を打ち出してい」るのか。本節では、この点について検討したい。

「課長さんが、休職にして、療養させたらどうかっていってきたわ。―二十何年も前に戦争があったかなかったか、なんてことはどうでもいいじゃないの。戦争があってもなくても、今の生活の方はおんなじなんでしょ？家を買う手金は打っちゃったし、昔の戦争がどうこういうことより子供たちのために、現在のこととこれから先のことを少し考えてくれなくては、こまっちゃうわ」

（小松左京「戦争はなかった」、一〇〇頁）

引用した場面は、「異なる世界の異なる世界の歴史の中に、とびこんでしまった」（九三頁）という仮説を確かめるために行動する主人公に向けて、彼の妻がなだめるように放った言葉である。この言葉からは、失われた「戦争」の「歴史／記憶」が人々の生活とは無縁のものとして認識されていることが窺える。換言すれば、「戦前の軍国主義をなかったことにし、高度経済成長に向かっていく戦後社会」（前掲、樺山）の姿がこの言葉に象徴されているといえよう。

当時、一四歳で終戦を迎えた小松は、国家政策による経済の復興と政治の安定が図られ、「戦前の軍国主義なかったことにし、高度経済成長に向かってい」（前掲、樺山）った戦後の社会を経験している。この点について、長山靖夫「小松左京『日本沈没』の意味」（一柳廣孝編『オカルトの帝国　1970年代の日本を読む』、二〇〇六、青弓社、三九頁）では、「「戦後」が終わったと政府与党がしきりに喧伝するようになった時期に作家となり、高度経済成長に至るこの時期、「日本」というものの何かが大きく変貌しつつある事態に、最も過激な表現をもって対応した作家の一人だった」と指摘されている。すなわち、「戦後社会に対する強い懐疑」を表現することは、小松の創作の出発点であったともいえるだろう。

さらに、テクストでは「戦争」の歴史を失った「世界」に葛藤する主人公の姿が描かれる。主人公は自問するなかで、「戦争」の光景を想起する。

夢とも思えぬ夢の中の轟々と燃えたける火焔と煙と熱い灰のむこうにひびく、焼け死んで行く何万人、何十万人の人々の、遠い阿鼻叫喚を彼ははっきりきいた。一万メートルの清澄の高空から、金属に包まれた業火を、無差別に機械的にふりまくものたちと、地上で焔にまかれ、高熱ゼリー状ガソリンにまといつかれて火の踊りを踊りくるい、つむじ風にまい上るトタン板に首をきりさかれる人たち、髪の毛がまる坊主にやけ、眼をむき出し、舌を吐き出し、ふくれ上って死んでいたセーラー服の女学生、灰燼と化し

た家財と、飢餓と危険と疲労の中に荒廃して石と化した心、一瞬の灼熱の白光ときのこ雲の下に、やけただれた肉塊となり、炭となり、一団のガスとなって死んでいった何万もの人々・・・。

（一〇一～一〇二頁）

この場面では、戦時の凄惨な光景が生々しく描写される。ここで強調される「戦争」の凄惨さの裏には、「戦争」を想像できない「世界」への痛烈な批判が示されているといえる。そして、「戦争」の記憶が失われたという事実は、主人公を一つの決断へと向かわせることになる。

だから、いわねばならない、と彼は決心した。もし、この世界が、その事を忘れてしまっているのなら、思い出させてやる必要がある。もし、この世界が、本当にあの戦争の体験をもっていないのなら、「告知」してやる必要がある。（中略＝稿者）この世界の中で、あの大戦争の悲惨と、そこに提出された巨大な問題について知っているのが、彼一人だとするならば、同胞のためにも、彼はその事をみんなに告げ知らせる義務がある。

（一〇二頁）

主人公は「戦争の悲惨さと、そこに提出された巨大な問題」を、忘却してしまった「世界」に「告知」していくことを誓う。この決断には、戦後社会に対する小松自身の「抵抗」の意思が示されているようである。すなわち、「戦争」を忘却しつつある「日常」への同化を拒絶し、戦後社会の「空気」に抗おうと試みる、同時代の一人の創作者としての意思表明であるといえよう。こうした小松の創作者としての姿勢が、テクストに重ね合わせるように表現されているのである。

以上のように、『戦争はなかった』は、デビュー作から連綿と続く「戦後社会に対する強い懐疑」を「歴史改変」というSF的手法で問い、その社会に抗おうとする書き手の姿勢を見出すことができるテクストであるといえるだろう。

三　小松左京のオーウェル『一九八四年』受容

前節での議論を踏まえて、本節では小松の『一九八四年』受容について考察していきたい。

テクスト分析に入る前に、小松が『一九八四年』をいかに受容したか、その背景を確認する。前述したように、小松は、早い時期からオーウェルに言及し、『一九八四年』やそれに関連する作品である武田泰淳『第一のボタン』に関心を示していた。さらに、雑誌『正論』（一九八四・二）に掲載された小松左京「わが青春の『一九八四年』―ジョージ・オーウェル回想」を参照すると、小松が『一九八四年』を初めて読んだのは「昭和二六年の終わりか二十七ぐらい」の時期で、読後「かなり気持ち悪い二日酔いみたいな症状が起こった」と語られている。ここで注目したいことは、『一九八四年』で印象的に残った点として「歴史の改変」を挙げていることである。小松は次のように述べている。

これは現実にやってるなと思ったのは、例のミニトルー（真理省）で、主人公のウィンストン・スミスが毎日毎日歴史の書き替えをやってる、抹殺を。これはもうありましたよ、向こうの文献で。英雄が批判されちゃってというのは、もう二六、七年のころにはいっぱい見えていましたからね。で、我々の周りでも、つまり日本共産党の中でも志賀義雄一派がやられ、国際派と所感派の

分裂が起こった時にこうなり、「昨日の同志は今日の敵」ですよ。

（小松左京「わが青春の『一九八四年』」、一一〇頁）

『一九八四年』の中で強い印象を受けたと語られる「歴史の改変」の設定が、デビュー作以降から継続した小松作品の重要なモチーフであることは興味深い。また、ここで語られる「国際派と所感派の分裂」とは、一九五〇年にコミンフォルム批判を契機に生じた共産党内での内部闘争のことを指している。当時、小松は共産党に所属しており、この出来事を経験している。小松は「みんなでよく話し合えばいい」と両者の対話と団結を主張したところ、「日和見主義だと痛烈に批判されて「党活動制限」の処罰」を受ける。その後、党の方針を転換していく共産党に嫌気がさし、離党することになる[6]。

ここで指摘したいことは、小松とオーウェルの背景に重なる部分があるという点である。オーウェルはスペイン内戦に共産党側の義勇軍として赴いた経験がある。この時、オーウェルは、共産党内部での権力争いによる、同じ左翼陣営内の共産党警察からの迫害や締め付けを受け、スターリニズムに嫌悪を抱くようになる。そして、この時の経験が、『一九八四年』の創作に繋がったと、複数の先行研究で指摘されている[7]。このオーウェルの作家としての背景は、共産党の内部闘争に嫌気がさし離党していった小松の背景と重なる部分があるといえる。このように小松とオーウェルの創作者としての背景の相似が、小松のオーウェル受容の下地になったという可能性も考えられるだろう。こうした背景を踏まえて、テクストに戻る。

前節で論じてきたように、「歴史の改変」をモチーフとする『戦争はなかった』は、小松の創作の出発点でもある「戦後社会に対する強い懐疑」と「抵抗」が表現されたテクストであった。そして、本節で注目するのは、その「歴史の改変」が「国家」あるいは「政府」によってなされていることを示唆する物語の結末である。物語の結末に、次のような場面が描かれる。

「わかった！―やっとわかったぞ！お前たちやっぱりかくしていたんだな。―あの戦争のことを…この世の中からかくしていたんだ。おれは見たぞ。お前・・・お前憲兵だろう！その腕章に・・・」

「これが？」と医局員は、十字のマークのはいった腕章をさした。

「いま見たんだ、その腕章をうらがえしてみろ！その裏にはたしかに、憲兵の腕章が・・・」

医局員と警察は、両側から彼の腕をとって、強引につれこんだ。彼はあばれながら、まわりにたかった野次馬にむかってなおわめきつづけた。

「みんなきてくれ！戦争は本当にあったんだ。―思い出してくれ、きいてくれ！」

（一〇五頁）

前節で述べたように、主人公は「戦争」の記憶を忘却した「世界」に、「あの戦争の悲惨を経験したもうひとつの日本」（一〇四頁）を継承していくことを決意する。この決意とは、別の「世界」に紛れ込んだ自分の状況を受け止める覚悟であるとも言い換えることができる。しかし、その覚悟は挫かれ、「戦争」を隠していたと推測される国家機関の手によって捕らえられてしまうという衝撃的な結末を迎えることになる。つまり、本作品は「歴史改変」というSF的手法で戦後社会へ懐疑を前面に押し出す一方で、国家の利害に一致した思想に国民を統制することの危うさを警鐘した「政治小説」の側面を持つ作品でもあ

ったといえるだろう。

前述したように、「国家の手によって歴史が書き換えられる」という設定は、「全体主義社会」を体現するオーウェル『一九八四年』においても描かれていた。この点を見逃してはならない。『一九八四年』の世界では、「真理省」という国の機関によって、国家を統制する政府の都合のいいように歴史が改竄されており、主人公であるウィンストンはその「真理省」に勤めている。高井貴一は、『『一九八四年』小考―歴史の改変と権力について」（奥山康治・佐藤義夫編『オーウェル　―二〇世紀をこえて』二〇〇二、音羽書房）において「歴史の改変」に関与するウィンストンについて次のように述べる。

真理省でのウィンストンの仕事は、党の予測の記事を現実の記録と一致させるために、その当初の予測の記事を訂正して、党の予測が正しかったことにする作業なのである。この絶え間のない訂正作業は、新聞ばかりでなく、書籍、定期刊行物、パンフレット―さらに政治的な、あるいはイデオロギー的な意味をもつと思われるあらゆる文書や記録にも適用されるのであった。日を追っていや、一分刻みに過去は現在に改められていったのである。

（一一〇頁）

真理省の記録局に勤めているウィンストンは、党の方針に合わせて、収集・蓄積された「歴史」の改竄を実行している。そうした作業に携わる中で、ウィンストンは、「過去の書き換え」が「現在」に多大な影響を及ぼすことに気付く。ここで、ジョージ・オーウェル『一九八四年』龍口直太郎・吉田健一訳（一九五〇、文藝春秋新社）の該当場面を引用しよう。

過去はただ単に改変されたばかりではなく、実際にはめちゃくちゃに破壊されてしまったのだ、と彼は考えた。あなた自身の記憶以外に何らの記憶も存在しないばあいに、どうしてあなたは明白な事実でさえも確立することができようか。彼は偉大な兄弟の名前が人の口にのぼるのを初めて聞いたのが何年であったか思い出そうと努めた。それは六十年代のある時期であったに相違ないのだが、それを確かめることはできなかった。もちろん党の歴史においては、偉大な兄弟はその歴史のそもそもの初めから革命の指導者、擁護者として姿を現わすのであった。

（四九頁）

この場面で語られるウィンストンの心情は、『戦争はなかった』で描かれる主人公の心情と酷似している。『戦争はなかった』において主人公は次のように心情を吐露する。

こんなことがあってもいいものだろうか―と彼は、貧血状態で視野が紫色に狭まるのを感じながら、胸の底でつぶやいた。―しかし、あの大戦争がなかったのだとしたら、―日本の運命をかえ、社会を上から下までまきこみ、かつてないみじめな敗戦の民族体験をあたえた。あの大戦争が、なかったのだとしたなら―あの強烈でいたましい精神の記録もまた、存在しないのは当然だ。

（九一頁）

このように、両テクストで語られるある種の「歴史観」には通じるものがある。これらを踏まえれば、『戦争はなかった』には、「歴史改

変」という『一九八四年』においても重要なモチーフが共通しているといえるだろう。

以上のように、「全体主義社会」を示唆する結末や「歴史の改変」というモチーフなど、『戦争はなかった』には『一九八四年』を想起させる共通点を看取できる。こうした両テクストの共通点は、小松が『一九八四年』から着想を得た可能性を浮上させる。すなわち、両作品を読み比べることで、「政治小説と科学小説の融合を『一九八四年』に見出し」、「政治小説、あるいは社会小説と科学小説の融合を自分の作品で果たすようになる」（前掲、相良）と指摘された小松の『一九八四年』受容の軌跡は、より明確に浮かび上がってくるのである。

四　「一九六八」下の想像力

ここまで『戦争はなかった』を主な対象とし、小松左京と『一九八四年』との関係性について議論を進めてきた。本節では、『戦争はなかった』が発表された時代に注目したい。『戦争はなかった』が発表された一九六〇年代は世界的な社会運動が勃発した時代である。この点について、小杉亮子「問い直される大学の境界―一九六八～六九年東大闘争」（坪井秀人・宇野田尚哉編『対抗文化史―冷戦期日本の表現と運動―』、二〇二一、大阪大学出版会）では、次のように述べられている。

> 一九六〇年代、とくにその後半は、ベトナム反戦や脱植民地運動、各国の政治イシューにかんする様々な抗議活動、カウンターカルチャーの隆盛などが相互に影響し合い、世界各地で社会運動が高揚した。とくにテト攻勢で始まった一九六八年はチェコスロバキアのプラハの春とそれにたいするソ連の侵攻、公民権運動の指導者だったキング牧師の暗殺、フランスの五月革命など、国境を越え、人びとの問題意識を強く喚起するできごとが続き、各国で社会運動が劇的に拡大した。世界的な社会運動の時代としての一九六〇年代は、一九六八年に象徴され、「一九六八」とも呼ばれる。
>
> （一四一頁）

このように、一九六〇年代は、世界全体で社会主義運動が巻き起こった時代の転換期であった。とりわけ、『戦争はなかった』が発表された一九六八年は「一九六八」と六〇年代の象徴する重要な年でもある。一九六八年に起こった出来事として、チェコスロバキアで「プラハの春」が起きたことは、本稿の問題を考える上で注目しなければならない。

「プラハの春」とは、チェコスロバキアの第一書記のドプチェクに主導された改革運動である。ドプチェクは、『行動綱領』という基本方針を一九六八年四月に発表する。この方針とは「支配」ではなく「説得」によって、「社会主義の発展と人びとが完全な平等社会のもとで、ゆたかに暮らせる共産主義社会の実現をめざす」という「人間の顔をした社会主義」を目指すものであった。しかし、この改革は一九六八年八月にソ連主導のワルシャワ条約機構軍の軍事介入によって失敗してしまう。ソ連や他の東欧諸国の指導者たち[8]は、自由化・民主化を求める「プラハの春」の影響が自国に波及し、自国の支配体制が揺らぐことを恐れたのであった。「プラハの春」は失敗に終わってしまうが、ソ連の社会主義体制に対する危機感を他国に募らせ、結果としてソ連の求心力の低下をもたらし、その後の崩壊へと繋がっていった[9]。

以上が「プラハの春」ついての概要となる。「プラハの春」は、同時期に起きていた世界各地の社会運動のなかでも、特に注目を集めた出

来事であった。当時、「プラハの春」は日本においてどのように受け止められていたか。いち早く「プラハの春」に関する資料を整理した『戦車と自由　チェコスロバキア事件資料集.第1』（一九六八、みすず書房）の「出版者の序」に次のような言葉が記されている。

ソビエトはかつて「新しい文明」（ウェッブ夫妻、一九三五年）とも名づけられた。この「新しい文明」は、ジョージ・オーウェルにいわゆる「一九八四年」への第一歩なのであろうか。マルクス主義者が、そのマルクス主義的批判を自己に適用することを怠ったために生じた歴史的現象が、スターリン主義であり、個人崇拝と粛清であった。また、動機と理想の純粋を失った結果、骨がらみの官僚主義と指導の政治的無責任が生じた。チェコ侵略はその歴史的帰結の一つである。

（三頁〈傍線＝論者〉）

ここで注目したいことは、「序文」に『一九八四年』への言及が確認できるという点である。この点からは、「プラハの春」の衝撃が日本における『一九八四年』受容にも加担していたことが示唆されるだろう。そして、このことは同時代のSF界の動きと無関係ではない。

同年に、『一九八四年』の二冊目の翻訳書である新庄哲夫訳版が『世界SF全集』（一九六八・一〇、早川書房）に収録され、刊行された。刊行当時の状況について言及した貴重な文献に、石川喬司『SFの時代　日本SFの胎動と展望』（一九九六、双葉社）がある。『SFの時代』は、日本のSF黎明期に唯一SF評論家として成果を挙げていた石川喬司が複数の雑誌で連載していた批評文を整理し収録した「日本SF史」の嚆矢である。本書では、次のように記されている。

「68年の最大のトピックは『世界SF全集』（全35巻・早川書房）のスタートだっただろうな。第一回配本の『ハックスリィ、オーウェル篇』は三万部も売れたそうじゃないか。」

「世界でも初めての画期的な試みって宣伝してたけど本当かい？」

「ああ。ヴェルヌやウェルズのクラシックSFから、米英ソ日仏独伊の〝新しい波〟たちの実験作品までを歴史的、体系的にまとめた、こんな企画は、どこにも見当たらないね。SFの歴史の浅い日本でこれが誕生した、ということは特筆に値いするよ。〈SFイコール科学小説〉〈荒唐無稽な紙芝居〉といった偏見を、この全集が吹き飛ばしてくれることに期待したいな」

（石川喬司『SFの時代』、二八一頁〈原文ママ〉）

『一九八四年』を収録した『世界SF全集』が刊行されたのは、一九六八年の一〇月であったが、一九六七年には企画が公表されていたため、「プラハの春」を受けての企画であったわけではない。しかし、その記念すべき第一冊目が『一九八四年』とハクスリー『すばらしい新世界』という「全体主義社会」を体現したSF作品であったこと、そして「三万部」という部数を達成したことは、同時代の社会情勢の影響があったことを窺わせる。

当時の時代背景として、『戦争はなかった』の成立した時期が「国境を越え、人びとの問題意識を強く喚起するできごとが続き、各国で社会運動が劇的に拡大した」（前掲、小杉）時代であったことと、一九六八年に起きた「プラハの春」が『一九八四年』への注目を集める出来事でもあったことは押さえておく必要があるだろう。さらに、こうし

た同時代の動きが、社会情勢に敏感な作家であった小松を含むSF作家たちにも、少なからず影響を与えていたことを指摘したい。

本稿では、『一九八四年』との影響関係が窺える作品として『戦争はなかった』を挙げたが、同年に発表された星新一『白い服の男』[10]にも共通したモチーフを見出すことができる。『白い服の男』は、『戦争はなかった』が発表された翌月に雑誌『SFマガジン』にて掲載された短編小説である。『白い服の男』の世界では、「セとしか口に出せない。戦争などと、語の全部などとても言えたものではない」と「戦争」という概念について考えることが禁止され、国民は特殊警察によって言動が盗聴されている。万一、特殊警察に捕まることになれば、〈人類の敵〉として公開処刑される。作品梗概だけでも、『一九八四年』を想起させるSFであることが窺えるだろう。このように「全体主義社会」が「戦争」をなかったことにするという発想は、小松を含め同時代のSF作家たちに共有されるモチーフであった。換言すれば、社会主義運動が勃発した激動の一九六〇年代に醸成された時代の想像力が、SF作品に「全体主義社会」のテーマを取り入れさせたほどに駆動していたともいえよう。

そのうえで、本稿で対象とした『戦争はなかった』に限定して述べれば、本作品は『一九八四年』に描かれた「全体主義社会」下の「歴史の改変」の問題を戦後日本の場に置き換えることでより具体的なイメージをもって提示しており、ここに「全体主義社会」の危うさを「戦争」を忘却してゆく戦後日本社会という同時代の文脈に接続しようとした小松独自の新たな解釈が指摘できる。すなわち、『一九八四年』に喚起された想像力と自己の問題意識を結びつけ、新たな創作へと再構築しようとした小松の『一九八四年』受容は、同時代のSF作家たちに共有された『一九八四年』的モチーフの受容に留まらず、『一九八四年』自体の新たな読みを拓く可能性までも秘めていたのである。

五　おわりに

本稿では、小松左京『戦争はなかった』を主対象とし、テクストの再評価をするとともに、『一九八四年』との関係性を考察し、小松の『一九八四年』受容についての検討を行った。

『戦争はなかった』は、「歴史改変」というSF的手法で戦後社会へ懐疑と抵抗を前面に押し出した一方で、国家の利害に一致した思想に国民を統制する「全体主義社会」の危うさを警鐘した「政治小説」の側面を持つ作品でもあった。そうした「全体主義社会」を示唆する結末や「歴史の改変」というモチーフなど、『戦争はなかった』には『一九八四年』を想起させる共通点が看取でき、「政治小説と科学小説の融合を『一九八四年』に見出し」、「政治小説、あるいは社会小説と科学小説の融合を自分の作品で果たす」（前掲、相良）、小松の『一九八四年』受容の軌跡が見出された。加えて、当時のSF作家たちに共有され、小松や星新一などの同時代のSF作品に取り入れられた「全体主義社会」への示唆が、社会主義運動の勃発した「一九六八」下の想像力に支えられていた可能性にも言及した。

小松左京が活躍し始めた時期は、日本SFが「ジャンルとしてのまとまりを得て自律し始める」（石埼、二〇〇九）時期でもある。石埼純一「ジャンル小説からのまなざし―戦後日本SFを例に―」（一柳廣孝・久米依子編『ライトノベル研究序説』、二〇〇九、青弓社）では、この時期の日本SFについて、次のように述べられている。

出版環境が整い始めたことで、SF小説を中心とする書き手が次々とデビューし始めた。星新一、小松左京、筒井康隆、光瀬龍、

平井和正、豊田有恒、眉村卓、広瀬正、石原藤夫といった作家たちが戦後SF作家の第一世代と考えられる。

太平洋戦争の記憶と戦後の高度経済成長のなかでの未来への関心―それは期待でもあり不安でもあった―は、ありえたかもしれない過去や、進歩を遂げたあるいは荒廃した未来の物語、現代社会のジレンマを書く物語を招来することになった。

（一三六頁）

日本SFは「太平洋戦争の記憶と戦後の高度経済成長のなかでの未来への関心」を支えに「ありえたかもしれない過去や、進歩を遂げたあるいは荒廃した未来の物語、現代社会のジレンマを書」き、その存在感を示すようになっていく。この動きは、「徐々に戦争（そして占領）という事実を忘れる方向に進」み、「戦争や歴史といった大掛かりな事象に背を向け、個々人の生活を描き出すことに力を注ぐようになる」（前掲、樺山）戦後の日本文学の流れとは対照的な動きであったといえる。

本稿で取りあげた『戦争はなかった』も、そうした日本SF界の動きの延長線上にあり、世界情勢や戦後の日本社会の姿に対する問いを巻き込みながら、オーウェル『一九八四年』の体現する「全体主義社会」の危うさを示そうとした小松の挑戦的なSF作品であったのではないだろうか。

注

1 一九四九年にイギリスで刊行され、監視体制が敷かれた独裁国家を描いたSF作品。全体主義体制への風刺作品として現在も世界中で多くの人々に読まれ、様々な現代的状況の参照点として言及され続けている。

2 武田泰淳のオーウェル『一九八四年』受容については、拙稿「武田泰淳とオーウェル『一九八四年』―武田泰淳『第一のボタン』論―」（広島大学国語教育学研究会『論叢国語教育学』、二〇二一・七、二四-三四頁）を参照されたい。

3 小島信夫「効果あげぬ短編集」（朝日新聞「文芸時評（下）」、一九六八・七・三〇・夕刊）

4 小松左京「地には平和を」（小松左京『小松左京全集〈一一〉お茶漬けの味・地には平和を　ほか』、二〇一九、株式会社イオ、二七六-三〇三頁）

5 樺山三英「戦後派と日本SF第一世代」（「戦争のない国の戦争文学」小史―シミルボン）

【URL】https://shimirubon.jp/series/26（投稿日：二〇一六年一一月一一日　更新日：二〇一六年一二月二三日　最終閲覧日：二〇一三年一月二五日）

6 自伝（二〇〇六、日本経済新聞）にて「共産革命には心が動かなかったが、反戦平和の主張には大いに共感した」と語られている。
参考：小松左京「小松左京自伝　第Ⅰ部　人生を語る」（小松左京『小松左京全集〈五〇〉　小松左京自伝―実存を求めて―』、二〇一九、株式会社イオ、二三-二七頁）

7 このことについて最初に言及した先行研究に、平野敬一「スペイン戦争をめぐって　ジョージ・オーウェルの場合」（『学苑』、第一七五号、一九五六、昭和女子大学光葉会、一二八-一三四頁）がある。平野は、翻訳される前の『カタロニア賛歌』を踏まえ、オーウェルのスペイン内戦の経験と『一九八四年』との関係について論じている。

8 特に、ワルシャワ条約機構に加盟する五か国、ソ連、東ドイツ、ポーランド、ハンガリー、ブルガリアを指す。

9 林忠行『粛清の嵐と「プラハの春」』、一九九一、岩波書店、四〇-五八頁

10 星新一「白い服の男」（浅田次郎編『イマジネーションの戦争：幻』、二〇一一、集英社、四二六-四四六頁）

（広島県立福山明王台高等学校）